



プログラミング思考を高める

先週4日（木）に、情報通信総合研究所の平井聡一郎先生を講師にお招きして、6組、4年2組、6年1組の3学級が研究授業を行いました。タブレットで動画を作成したり、プログラムを組んでロボットを動かしたりすることを通して、一人一人がどうすれば自分の意図するように絵やロボットが動くかを考え、それをチームで話し合っって課題を克服していく姿がとても頼もしかったです。子供たちが生きていく近未来 Society 5.0 の世の中は、論理的思考力や協働して課題を解決するコミュニケーション能力が求められます。今後もプログラミング教育を通して、子供たちのそのような力を伸ばしていきます。



シリーズ「東京オリンピック」⑪ ～ここ一番の集中力とチームの絆～

シリーズ第11回は、アーチェリー男子団体の3位決定戦を振り返ります。この試合には、古川高晴選手、河田悠希選手、武藤弘樹選手の3選手が、銅メダルをかけて挑みました。試合は最後まで大混戦となり、勝負の行方は、選手3名が一射ずつを放ち、その合計点で勝敗を決める「シュートオフ」に持ち越されました。先行のオランダは、10点+9点+9点の28点をマーク。一方、後攻の日本は、一人目の河田選手が9点、二人目の古川選手も9点となり、三人目の武藤選手は、絶対に10点を射抜かなければならないという厳しい展開になりました。その大きなプレッシャーを背負いながらも、武藤選手は70m先の的のど真ん中の10点（インナー10）に矢を命中させ、28点で同点ながら、より中心に近い位置を射抜いた日本が勝利しました。

日本男子団体史上初のメダル獲得となった背景には、2012年のロンドンオリンピック個人銀メダリストで、オリンピック5大会連続出場という経歴を持つベテランの古川選手が、初出場の河田選手と武藤選手を盛り立て、素晴らしいチームの絆を築けていたことが大きいと思います。武藤選手が、古川選手と河田選手の思いも一緒に乗せ、ここ一番の集中力を発揮して放った矢が的のど真ん中に突き刺さった感動の瞬間は、今もなお鮮明に浮かんできます。



この日本男子チームの活躍を見ていたら、本校6年1組担任の蟹江陽平先生のお姉さん（蟹江美貴さん）が、2012年のロンドンオリンピックで日本女子団体史上初となる銅メダルを獲得されたときのことを思い出しました。あのときの蟹江選手の大活躍も、本当に胸が熱くなりましたね・・・。